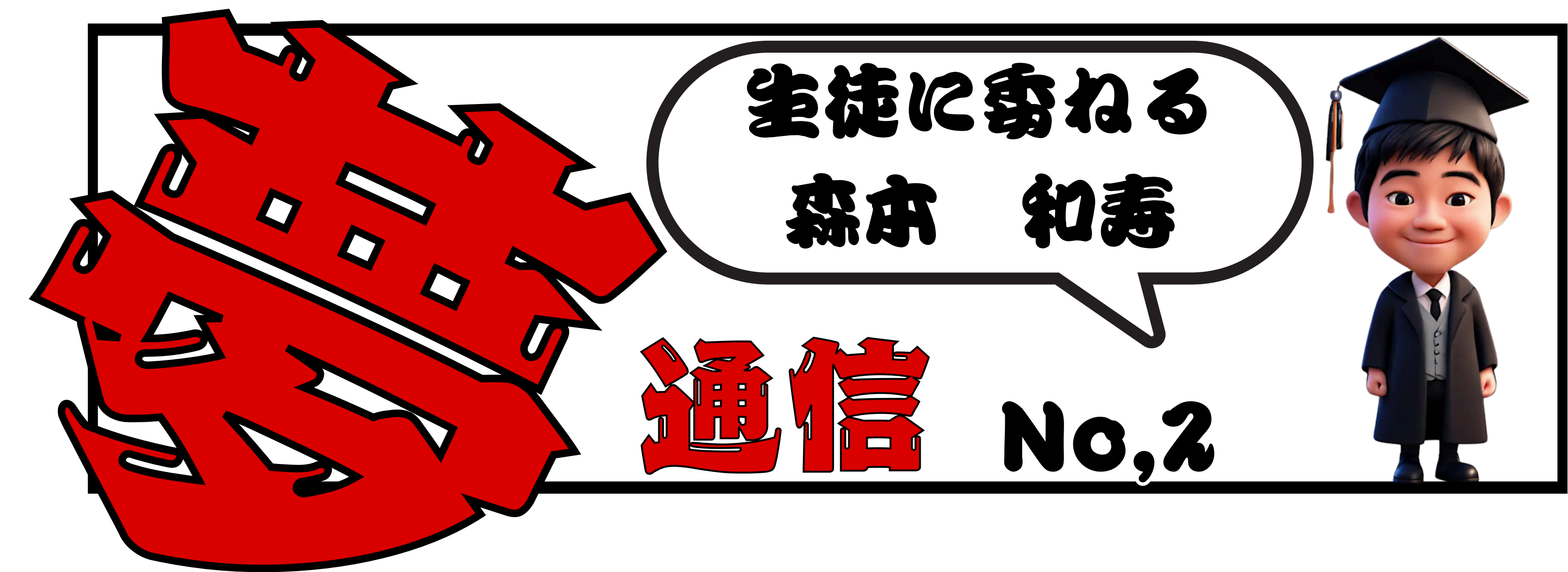




～5月26日校内研（指導助言①）～

1. 授業計画（単元計画）について

授業は「引き算」が原則

授業を欲張りすぎると、複雑すぎる「幕の内弁当」のような授業になってしまいます。また、目標や活動を複数設定する「フタコブラクダ（山が2つある状態）」も避けるべきです。

例えば、めあては1つ、活動も1つくらいに絞ることが理想です。ベースをシンプルにした上で、授業のどの部分を複雑化させるかを意図的に考えることが重要です。

授業の中でどこに重きを置くのか（①仮説で議論②実験方法を議論するか）という「山」を明確にし、目標と活動を一体化させることが大切です。

【補足説明】

シンプルにするということは、一つのことを「深く」考えることができる。

ただ、大切にすべきことは・・・「めあて（問い）」の表現・投げ方を間違ってしまうと、生徒が「何をすべきか勘違いした状態」や「ゴールが見えない・わかっていない」状態で授業が進んでしまう。すると、ゴールした姿も教師が想定した姿とは外れてしまう。

つまり、「めあて（問い）」をどうするかで、その授業の結果が大きく変わるということである。また、めあてを提示しないということは自分自身が込めた授業への思いを無碍（むげ）にしている事と同意である。めあての提示は約5分、されど5分。必ずめあての提示を！

2. 10年後も使える力の育成

コミュニケーション能力や非認知能力といった「ソフトスキル」だけを直接的に求めると授業はつまらなくなる。

特定領域の知識である「ハードスキル」を学ぶことを通して、ソフトスキルを育てていく（内容を学ぶことを通して形式も目指していく）ことが重要です。教科特有の面白さを経験させ、本質的な部分を理解させることが求められます。

【補足説明】

「10年後も使える力」というのは大きく二つに分けることができます。

①「形式陶冶（けいしつとうや・ソフトスキル）」②「実質陶冶（じっしつとうや・ハードスキル）」です。

①はコミュニケーションスキル・非認知です。今回は、ヒントカードを使う（情報活用）、他の実験方法に対して批判的（成立しない理由）に考える、といった点が挙げられます

②は専門的な知識、今回は原子の基礎知識、実験方法の本質的な理解、気体の質量を測る（方法を考える）といった点が挙げられます。

今回、森本先生は「水上置換などの3つの方法の良さって何がありますか？」と聞きましたが、あれはつまり実験方法の正確な理解を聞いたのではなく、気体には軽いものも重いものも、水に溶けてしまうものもある。それが、日常で知識が活用されることがある。（一酸化炭素は軽いため、火事の際はしゃがむ）

『コミュニケーションスキルがあったとしても、話題の知識がないとコミュニケーションを取ることはできない』ということです。

※ただ・・・形式陶冶も重要であることは変わりません。

4月に先生方には「どんな力をつけて欲しいですか」と聞きました。あれは「形式陶冶より」の質問だったと思います。もちろんそれも大事ですが、**今一度先生方に考えて欲しいことは「担当教科（国語や数学）の面白さはなんですか？」**ということです。自分自身が考える教科の面白さ（実質陶冶）を授業（形式陶冶）を通して、身に付けさせていきたいと思っています。